



Title	江戸時代の『莊子』研究の評価：中井履軒撰『莊子 雕題』を題材に
Author(s)	藤居, 岳人
Citation	中国研究集刊. 2023, 69, p. 101-118
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90862
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

江戸時代の『莊子』研究の評価

―中井履軒撰『莊子雕題』を題材に―

藤居 岳人

はじめに

道家思想に関する研究は、『老子』『莊子』を対象とすることが多い。『老子』『莊子』に関する研究書はすべてを把握できないほどであり、それぞれの訳注書も各種存在している。本稿では『莊子』を取り上げるが、『莊子』の訳注書は日本においてもすでに数多く出版されている。その中で現状では池田知久『莊子 全訳注』（上・下）（講談社学術文庫、二〇一四年）（以下、池田『莊子』と称する）が最も詳細な訳注書だといえる（注1）。該書の特徴はその注釈にある。非常に詳細な内容で、中国や日本の主要な注釈書をほぼ網羅したうえで池田氏自身の解釈を示している。中国の注釈書については、嚴靈峯編輯の『無求備齋莊子集成初編』（台湾 芸文印書館、一九七二年）、『無求備齋莊子集成統編』（台湾 芸文印書館、一九七四年）、『無求備齋老列莊三子集成補編』（台北 成文出版社、一九八二年）所収の多くの注釈書を取り上げる。嚴靈峯の上記三種のシリーズは『莊子』の主要な注釈

書をほぼ網羅しているといっても過言ではないが、池田『莊子』は上記三種のシリーズに取り上げられていない中国や台湾の『莊子』注釈書も少なからず取り上げる。それに加えて、現代に至るまでの日本の主要な注釈書もほぼ網羅して参照している。現代日本における代表的な訳注書としては、赤塚忠『莊子』（上・下）（全訳漢文大系第一六・一七巻、集英社、上巻は一九七四年・下巻は一九七七年に刊行）（以下、赤塚『莊子』と称する）や金谷治『莊子』（全四冊）（岩波文庫、一九七一―一九八三年）（以下、金谷『莊子』と称する）、福永光司『莊子』（全六冊）（中国古典選、朝日新聞出版、一九七八年）（以下、福永『莊子』と称する）などがあり、これらの訳注書すべてを池田『莊子』は取り上げる（注2）。したがって、池田『莊子』を見れば、現在までの『莊子』本文の解釈の様相をほぼ把握することができるというよい。

最も詳細な訳注書である池田『莊子』もそうだが、赤塚『莊子』など、現代の日本の訳注書は中国の注釈書だけでなく、日本の注釈書も取り上げている。池田『莊子』では、上述の赤塚『莊子』や金谷『莊子』、福永『莊

子』を取り上げることが最も多く、あとは注2で言及した諸研究である。ただ、池田『莊子』は、明治時代の『莊子』研究書にはかなり言及しているものの、江戸時代における『莊子』研究の成果にはほとんど言及していない。この点はやや不十分だといえる。

では、徹靈峯の上記三種のシリーズはどうだろうか。実は『無求備齋老列莊三子集成補編』において江戸時代の『莊子』研究が取り上げられている。『無求備齋老列莊三子集成補編』は全五六冊だが、そのうち第四二〜五〇冊に日本の『莊子』研究書が収められており、そこで江戸時代の『莊子』研究もかなり取り上げている。その中で岡松夔谷『莊子考』が第五〇冊に収められており、池田『莊子』ではこの『莊子考』の注釈を若干取り上げている。岡松夔谷はまだ江戸時代だった一八二〇年（文政三）の生まれだが、『莊子考』は一九〇七年（明治四〇）の排印本であり、江戸時代に刊行された注釈書ではない。したがって、現状では最も詳細な訳注書の池田『莊子』ですら江戸時代の『莊子』注釈書についてはあまり取り上げられていない状況だといえる。では、他の訳注書はどうか。福永『莊子』は、その「内篇解説」の項で「徳川時代には……『莊子』は広く読まれながらも、この書に関する研究は、ほとんど見るべきものがなく、岡松夔谷の『莊子考』、杜多秀峰『莊子覈玄』、宇津木益夫の『解莊』、帆足万里の『莊子解』などが数えられる程度である」と述べている（注3）。また、赤塚『莊子』では、「解説」の項で「この時代（江戸時代―筆者注）のものは、中国の郭象・林希逸・焦竑らの解釈を紹介することを主とし、これに短評を加える程度のもが多い。その中で杜多秀峰の『郭注莊子覈玄』、中井履軒の『莊子雕題』、宇津木益夫の『解莊』などは独自の見解を示しているものである」という（注4）。

このように、江戸時代における『莊子』研究について、参照するに値す

るものは多くないという評価がこれまでは主流だった。しかし、実際のところはどのようなだろうか。筆者はこれまで中井履軒『莊子雕題』を研究してきており、その注釈はかなり高い水準にあると考えている（注5）。現代における上述の『莊子』訳注書で『莊子雕題』に言及するのは赤塚『莊子』のみだが、『莊子雕題』の独自性や水準の高さを示すことができれば、江戸時代の『莊子』研究に対する従来の評価が十分なものではなかったことを明らかにできると考える。本稿は、『莊子雕題』からうかがえる履軒の注釈態度や注釈内容の特徴を検討して、その注釈の独自性や水準の高さを明らかにし、江戸時代の『莊子』研究に対する従来の評価を見直す必要性を示すことを目的とする。

一 『莊子雕題』と『莊子虜齋口義』と

そもそも履軒の『莊子雕題』（以下、『雕題』と称する）とはどのような注釈書なのだろうか。『雕題』については、注5において言及した拙稿ですでに論じているが、本章では確認のためにその概要を述べる。『雕題』は、江戸時代に広く読まれた林希逸『莊子虜齋口義』（以下、『口義』と称する）の刊本の余白に書き込まれた履軒の注釈をさす。現在、『雕題』の履軒自筆本は大阪大学附属図書館懷徳堂文庫に所蔵されており、この自筆本を影印した懷徳堂記念会編『莊子雕題』（吉川弘文館、一九九八年）が刊行されている。上述の『無求備齋老列莊三子集成補編』第四七冊にも寺町雅文による『雕題』の写本が収められており、『雕題』の存在が広く知られていたことがうかがえる。この『雕題』は、『口義』の注釈に対する履軒の見解を述べたものが多いため、必然的に『口義』の解釈に対する批判の評言が多い。

たとえば、履軒は「虜齋為理学、而好老莊。每多牽合調停之言。此竭力引莊子、附于儒籍也（虜齋は理学を為めて、而も老莊を好む。毎に牽合調停の言多し。此れ力を竭くして莊子を引き、儒籍に附すなり）」（在宥篇九頁）と述べたり、「虜齋竟不失儒者氣象。故往々不得莊子口氣（虜齋は竟に儒者の氣象を失わず。故に往々にして莊子の口氣を得ず）」（齊物論篇二六頁）と述べたりしている（注6）。すなわち、『口義』は道家思想の書である『莊子』を儒学の知識でもって強引に解釈しているのだと批判する。そもそも林希逸は宋学の林光朝の系統に属する儒者である（『宋元学案』巻四七、艾軒^{がいけん}学案を参照）。したがって、道家思想の書であろうと、儒学的に解釈するのはある程度予想されることである。

それに対して、履軒は『莊子』や著者の莊子に対して次のように評する。

註家嫌其虚誕、乃遷就作解。……何必苦心回護異端之人哉（註家は其の虚誕を嫌いて、乃ち遷就（こじつけ）して解を作る。……何ぞ必ずしも苦心して異端の人を回護せんや）。（天地篇一〇四頁）（注7）

履軒たち儒者から見れば『莊子』は「虚誕」の書であり、莊子は「異端の人」なのである。この例以外にも、『雕題』では莊子を「異端之魁」（在宥篇九二頁）や「異端家」（至樂篇一四七頁）などとも称しており、履軒は道家思想とは明確に一線を画する立場にある。

では、履軒が『莊子』を注釈するときの基本的態度はどうだろうか。彼は『口義』の注釈を批判しているから、儒学的解釈を基本的に認めないことはいままでもない。それは次の語からもうかがえる。

読莊子只以莊子解之可也。切不当引論孟作拠焉（莊子を読むときは、只だ莊子を以て之を解せば可なり。切に当に論孟を引いて拠と作すべからず）。（齊物論篇一八頁）

そもそも『莊子』は「虚誕」の書であり、その著者の莊子も「異端の人」である。したがって、荒唐無稽な内容を有する『莊子』のような書に対して、『論語』や『孟子』を引用したうえで強引な儒学的解釈を施すよりも、むしろ『莊子』を道家の書として素直に解釈する方がよいのだと履軒は考える。すなわち、『口義』のように『莊子』に対して苦心して儒学的解釈を施す必要はないという（注8）。

すでに述べたように、履軒は『口義』の儒学的解釈を『雕題』の各箇所でも批判している。また、『口義』には儒学的解釈以外にも種々の強引な解釈があり、それに対する履軒の批判も少なくない。たとえば、『莊子』全編の末尾に『口義』は「諸家経解、言文法者理或未通、精於理者於文或略。所以説得不精神、解得無滋味。独艾軒先生道既高而文尤精妙。所以六経之説、特出千古（諸家の経解、文法を言う者は理 或いは未だ通らず、理に精しき者は文において或いは略なり。読み得て精神ならず、解き得て滋味無き所以なり。独り艾軒先生（林光朝）の道は既に高く文は尤も精妙にして、六経の説 特に千古に出る所以なり）」と述べるが、それに対して、履軒は次のようにいう。

蓋虜齋以精理文法完備自負、自比於艾軒耳。……如論文法、往々舛理、且其極口贊嘆其妙者、皆不能解其義、而徒以妙々奇特嚇人、以自藏拙耳。読者尤不可不知也（蓋し虜齋は理に精しく、文法完備するを以て

自負し、自ら艾軒に比すのみ。……如えば文法を論ずれば、往々にして理に舛^{そむ}き、且つ其の口を極めて其の妙を贊嘆する者は、皆な其の義を解すること能わずして、徒^{いたずら}に「妙々」「奇特」「(の語)」を以て人を嚇^{おそ}し、以て自ら拙^{かく}を蔵すのみ。読者は尤も知らざる可からず。(天下篇二七一頁)

『口義』では『莊子』の諸注釈家について、「文法」の理にも通じず「理に精しく」もないと批判し、ただ自分の師匠筋にあたる林光朝のみが優れた学説を説いていると述べる。しかし、履軒にしてみれば『口義』の注釈こそが不十分だという。すなわち、『口義』は『莊子』の文章の意味を十分に理解できておらず、みずからの拙劣さを隠すために「妙々」や「奇特」などといった賞賛の語を弄しているというのである(注9)。

このように『雕題』では『口義』の儒学的解釈やその強引な解釈を批判する。特に『口義』の強引な解釈に対する批判は『雕題』の随所にその例を見ることができ、そのような例は履軒独自の解釈の性格を端的に表わしているといえる。以上が拙稿でこれまで論じた『雕題』の特徴の概要である。

では、その『雕題』に見える履軒独自の解釈はどのような特徴を有しているのだろうか。「はじめに」でも述べたように、赤塚『莊子』は履軒の『雕題』に対して「独自の見解を示している」と評する。ただ、具体的にどのような点を独自の見解だとしているかは明確ではない。次章以下、『雕題』の注釈に見えるいくつかの特徴を取り上げてその解釈の内容を分類し、『雕題』の注釈の独自性を明らかにしてゆく。

二 『莊子雕題』による本文批判(その1)

―その種類と事例と―

『雕題』の独自性の一つは、その本文批判にある。履軒の経書注釈として『論語逢原』や『孟子逢原』などがあり、これら履軒の経書注釈においても衍文や脱文の指摘を見ることが出来る。ただ、『雕題』は非常に多くの本文批判を展開しており、それが『雕題』の最も特徴的な点だといえる。履軒も儒者であるから、本来、中国古典の本文批判にはかなりの躊躇の意識が働いていてもおかしくないはずである。それにもかかわらず、『論語逢原』や『孟子逢原』などの履軒の経書注釈において、すでに本文批判の指摘が見えることから、履軒にとって本文批判を忌避する意識は、他の儒者に比べてそれほど強くなかったようである。これは彼の合理的精神が表われた一例だともいえよう。

ともあれ『雕題』における彼の本文批判の例を見てゆくことにする。『雕題』の本文批判は、a. 衍字衍文の指摘、b. 脱字脱文の指摘、c. 誤字の指摘、d. 本文の錯誤の指摘、e. 本文への讒入の指摘、の六種類に分類できる。また、これらの履軒の注釈には、本文批判の根拠や意図について、説明がある事例と説明のない事例とがある。本章では、『雕題』において本文批判にあたっての説明のない事例を検討する。

a. 衍字衍文の指摘

① 逍遙遊篇一三頁

「本文」是其言也、猶時女也(是れ其の言や、猶^{なお}時の女^{なんじ}のごときなり)。

〔雕題〕女字疑衍（女の字 疑うらくは衍なり）。

② 逍遙遊篇一四頁

〔本文〕以盛水漿、其堅不能自、挙也（以て水漿を盛れば、其れ堅くして自ら挙ぐるゝこと能わざるなり）。

〔雕題〕自字疑衍（自の字 疑うらくは衍なり）。

③ 齊物論篇二一頁

〔本文〕彼出於是、是亦因彼。彼是方生之説也。雖然、方生方死、方死方生、……（彼は是れより出て、是れも亦た彼に因る。彼是方生の説なり。然りと雖も、方に生じ方に死し、方に死し方に生じ、……）

〔雕題〕雖然二字疑衍（雖然の二字 疑うらくは衍なり）。

④ 齊物論篇二四頁

〔本文〕有成與虧、故昭氏之鼓琴也。無成與虧、故昭氏之不鼓琴也（成と虧と有るは、故より昭氏の琴を鼓するなり。成と虧と無きは、故より昭氏の琴を鼓せざるなり）。

〔雕題〕兩故字疑衍（兩つながらの故の二字 疑うらくは衍なり）。

①②③④は、逍遙遊篇と齊物論篇とのみからの引用だが、他篇にも衍字衍文を指摘する事例が数多く見える。ちなみに①②③④の例はすべて履軒が衍字だと指摘する文字を取り除けば、確かに文意はすつきりする。たとえば、①の「女」の字を除けば「是れ其の言や、猶時くのごときなり」となる。上述のように、本来、中国古典の本文は、できる限り変改せずに解釈することが基本的立場である。①の場合、諸注釈書のうち、『口義』など

は「女与汝同（女は汝と同じ）」と述べて、上記したように「是れ其の言や、猶時の女のごときなり」と、「女」の字を残しつつ何とかして解釈しようとする。それに対して、『雕題』はそのような意識が薄いのである。

b. 脱字脱文の指摘

① 逍遙遊篇九頁

〔本文〕故九万里則風斯在下矣。而後乃今培風、背負青天而莫之夭闕者（故に九万里なれば則ち風は斯れ下に在り。而る後に乃ち今 培風ありて背に青天を負いて之を夭闕する者莫し）。

〔雕題〕培風之上、脱乘駕等字（培風の上、乘駕等の字を脱す）。

② 人間世篇四一頁

〔本文〕若然者、人謂之童子、是之謂与天為徒。外曲者、与人之為徒也（然るが若き者は、人 之を童子と謂い、是れを之と天と徒為ると謂う。外に曲がる者は、人との徒為るなり）。

〔雕題〕徒下、疑脱也字。（「与天為徒の」徒の下、疑うらくは也の字を脱す。）

③ 徐無鬼篇一九六頁

〔本文〕我將勞君。君有何勞於我（我 將に君を勞わんとす。君有た何ぞ我を勞わん）。

〔雕題〕勞下、疑脱於字（我將勞君の）勞の下、疑うらくは於の字を脱す）。

④ 則陽篇二一二頁

「本文」昔予為禾、耕而鹵莽之、則其亦鹵莽而報予。芸而滅裂之、其亦滅裂而報予（昔、予、禾を為るに、耕して之を鹵莽にすれば、則ち其の亦も亦た鹵莽にして予に報ず。芸りて之を滅裂にすれば、其の亦も亦た滅裂にして予に報ず）。

「雕題」其其上、疑脱則字（其亦滅裂の）其上、疑うらくは則の字を脱す）。

①は文脈から見た履軒の指摘である。すでに述べたように、『雕題』は『口義』の刊本の余白に記された履軒の注釈だが、同部分の『口義』に「培、厚也。九万里之風乃可謂之厚風。如此厚風、方能負載鵬翼（培は厚きなり。九万里の風乃ち之を厚風と謂う可し。此くの如き厚風は、方に能く鵬翼を負載す）」（逍遙遊篇一〇頁）とあり、恐らくこの部分については履軒も『口義』の解釈に従っているのだろう。したがって、「培風」の上に「乗」「駕」などの字を補って「培風に乘る」あるいは「培風に駕る」と訓むべきだといふ。ちなみに諸家は王念孫『讀書雜誌』が「培之言馮也。馮、乗也（培は馮を言うなり。馮、乗るなり）」と述べる説に従って「風に培りて」と訓むことが多い（注10）。

①以外の例は、たいいてい本文の上下の言いまわしに合わせるための指摘である。たとえば、②の指摘は「与天為徒」の下に「与人之為徒也」とあり、その下部の表現と合わせる意図がある。それならば「与人之為徒也」の「之」の字が余計だが、それについては『雕題』ではテキスト本文に「与人^之為徒也」と、朱で「之」の字を囲んで衍字であることを示している。③は「我将勞君」の下に「君有何勞於我」とあり、同じく下部の表現に合わせる意図である。④も同様に「其亦滅裂」の上に「則其亦鹵莽」と

あつて上部の表現に合わせる必要があるとの指摘である。

c. 誤字の指摘

① 逍遙遊篇九頁

「本文」蝸与鸞鳩笑之曰、……（蝸と鸞鳩と之を笑いて曰く、……）

「雕題」鸞当作鸞字之訛耳（鸞は当に鸞の字の訛りと作すべきのみ）。

② 大宗師篇六五頁

「本文」朝徹而後能見独（朝徹して而る後に能く独を見る）。

「雕題」朝疑朗之譌（朝疑うらくは朗の譌りなり）。

③ 大宗師篇六五

「本文」殺生者不死、生生者不生（生を殺す者は死せず、生を生ずる者は生ぜず）。

「雕題」生生者、疑生死者之譌（生を生ずる者、疑うらくは死を生ずる者の譌りなり）。

①の「鸞鳩」は諸説があつて小鳩の意とする注釈が多いが、『經典積文』にも「本或作鸞、音預（本と或いは鸞に作る、音は預なり）」とあるように、履軒も鸞鳩の意だとしている。ただし、履軒がそのように解する論拠は不明である。②は同箇所の『口義』に「朝徹者、胸中朗然、如在天平且澄徹之氣也（朝徹とは、胸中朗然として、天に在りて平且澄徹の氣の如きなり）」とあることから、『口義』の解釈を参考にしていてと考えられる。③は文脈から判断しての説だと思われるが、他に『雕題』と同様の説を説く注釈は

管見の限り見当たらない。

d. 本文の錯誤の指摘

① 人間世篇三八頁

「本文」死者以国、量乎、沢若蕉、(死者 国を以て量り、沢における蕉の若し)。

「雕題」以国至若蕉七字、蓋有錯誤也。註妄作解。不可從(以国より若蕉に至る七字、蓋し錯誤有るなり。註は妄りに解を作る。従う可からず)。

② 徳充符篇五五頁

「本文」……且、而雌雄合乎前。是必有異乎人者也(……且つ而して雌雄前に合まる。是れ必ず人に異なる者有るなり)。

「雕題」且而雌雄合乎前一句、全然不通。必有錯誤也(且而雌雄合乎前の一句、全然通じず。必ず錯誤有るなり)。

③ 徳充符篇五五頁

「本文」為天子之諸御、不爪翦、不穿耳。取妻者止於外、不得復使。形全猶足以為爾。而況全徳之人乎(天子の諸御と為れば、翦を爪みらず、耳を穿たず。妻を取る者は外に止まりて、復た使うことを得ず。形全きものすら猶以て爾りと為すに足る。而るを況んや全徳の人をや)。

「雕題」所取何在。此十字恐錯文(取る所は何くに在らん。此の「取妻者止於外不得復使」の「十字は恐らくは錯文なり)。

①②③ともに諸注釈家の解釈が分かれる箇所だが、『雕題』のように明確に「錯誤有り」「錯文」などと指摘する注釈はなく、意味が通るように何と

かして解釈しようと腐心する注釈がほとんどである。たとえば、①について、『口義』では「輕民之生而戕賊之。量其國中、前後見殺者、若沢中之蕉然。謂輕民如草芥也(衛君は)民の生を輕んじて之を戕賊す(殺す)。其の國中を量れば、前後に殺さるる者、沢中の蕉の若く然り。民を輕んずること草芥の如きを謂うなり)(人間世篇三八頁)と述べて、上述したような「死者 国を以て量り、沢における蕉の若し」という訓詁になる。また、赤塚『莊子』では、『口義』と同様の訓詁を成玄英説として紹介し、他に林雲銘説・郭慶藩説・奚侗説・馬叙倫説などを紹介したうえで、「死者は、国に以てし、沢に量ちて、蕉かるるが若し」と自身の訓詁を提示しており、この箇所の解釈が諸説紛々であることを解説している(注11)。

e. 本文への讒入の指摘

① 齊物論篇一八〜一九頁

「本文」喜怒哀樂、慮嘆變熱、姚佚啓態、樂出虛、蒸成菌。日夜相代乎前、而莫知其所萌(喜怒哀樂、慮嘆變熱、姚佚啓態、樂は虚より出て、蒸は菌と成るがごとし。日夜 前に相代わりて、其の萌す所を知る莫し)。

「雕題」樂出虛二句、当在下章之首。不然錯簡耳。註大牽(樂出虚の二句、当に下章の「日夜相代乎前」の「首に在るべし。然らざれば錯簡なるのみ。註は大いに牽(こじつけ)なり)。

② 天地篇一一頁(「孝子不諛其親、忠臣不諂其君、臣子之盛也(孝子の親に諛らず、忠臣 其の君に諂わざるは、臣子の盛んなるなり)」章の後部)

「本文」厲之人夜半生其子、遽取火而視之、汲汲然惟恐其似己也（厲の人夜半に其の子を生めば、遽に火を取りて之を視る、汲汲然として惟だ其の己に似んことを恐るるなり）。

「雕題」是節蓋錯簡。宜在上文知其愚之前（是節 蓋し錯簡なり。宜しく上文の知其愚の前に在るべし）。

③天道篇一一八頁（「昔者舜問於堯曰、天王之用心何如（昔者 舜は堯に問いて曰く、天王の心を用いること何如と）」章の冒頭）

「雕題」是篇首至是節頗不類乎莊生筆力口氣。或恐後人之附益讒入焉者（篇首よりは是節に至るまで 頗る莊生の筆力口氣に類せず。或いは恐らくは後人の附益讒入する者なり）。

④天運篇一二四頁（「北門成問於黃帝曰（北門成 黃帝に問いて曰く）」章の後部）

「本文」吾又奏之以無怠之声、調之以自然之命。……或謂之死、或謂之生、或謂之実、或謂之榮、行流散徙、不主常声。世疑之、稽於聖人。聖也、達於情而遂於命也。天機不張而五官皆備、此之謂天樂、無言而心悅。故有焱氏為之頌曰、……（吾 又た之を奏するに無怠の声を以てし、之を調うるに自然の命を以てす。……或いは之を死と謂い、或いは之を生と謂い、或いは之を実と謂い、或いは之を榮と謂い、行流散徙して、常声を主とせず。世は之を疑いて、聖人に稽す。聖なる者は、情に達して命を遂ぐるなり。天機張らずして五官皆な備わる、此れを之天樂と謂い、無言にして心悦ぶ。故に有焱氏 之が頌を為りて曰く、……）

「雕題」世疑之至謂天樂七句、疑錯簡。是与上下文不相連屬。註家妄作解

耳（世疑之より謂天樂に至る七句、錯簡を疑う。是れ上下文と相連屬せず。註家は妄りに解を作るのみ）。

①②③④すべて『雕題』のように明確に本文讒入説を説く注釈は管見の限り見当たらない。たとえば、①については、『雕題』が書き入れられた『口義』の刊本では「樂出虚、蒸成菌」と「日夜相代乎前」との間に『口義』の注釈が記されており、「樂出虚、蒸成菌」の前に『口義』の注釈を差し挟んで「樂出虚、蒸成菌。日夜相代乎前」と連続させるべきだというのが『雕題』の主張である。さらに『口義』では「其人……実皆不自由、如樂之出於虚、如氣之蒸成菌（其人……実に皆な自由ならざること、樂の虚に出るが如く、氣の蒸 菌と成るが如し）」と述べて、「樂出虚、蒸成菌」について、人間の不自由な様相を形容したものだとして解しているが、『雕題』は『口義』の解釈を牽強付会だと断じている。実際、他にも金谷『莊子』では「樂出虚、蒸成菌」について、前後との関係も悪いことから、原文の字句に誤りがあることを疑っている（注12）。

上記のように、aからeまで『雕題』による本文批判の例を見てきた。本文批判の事例は上述の例に止まらず枚挙に遑がない。上述の例のように『雕題』には批判の意図を記さない項目が多く、その意図はこちらで類推する他はないが、たいてい類推は可能である。実際、他にも本文批判の意図を述べずに、単に衍字や脱字などの指摘をするだけの事例は『雕題』に多いが、指摘の理由を述べている箇所も少なからず見受けられる。

では、『雕題』に見える本文批判の意図について、指摘の理由を述べている箇所にはどのようなものがあるのだろうか。

三 『莊子彫題』による本文批判（その2）

―その意図するところ―

本章では、本文批判の根拠や意図に言及する『彫題』の事例を取り上げて、履軒の注釈態度の特徴を探る契機とする。

まずは『彫題』の「文勢」（文章の勢い）を根拠とする事例について検討する。

①逍遙遊篇九頁

「本文」……故九万里則風斯在下矣。而後乃今培風、背負青天而莫之夭闕者。而後乃今將凶南（……故に九万里なれば則ち風は斯れ下に在り。而る後に乃ち今 培風ありて、背に青天を負いて之を夭闕する者莫し。而る後に乃ち今 將に南を凶らんとす）。

「彫題」而後乃今重複失文勢。蓋上句衍文耳（而後乃今は重複して文勢を失う。蓋し上句は衍文なるのみ）。

②天地篇一一頁

「本文」……是故高言不止於衆人之心。至言不出、俗言勝也（……是の故に高言は衆人の心に止まらず。至言 出ざるは、俗言勝ればなり）。

「彫題」至言不出之下、疑脱文。蓋上文之対語、有於衆人之心之耦也。古人雖不重対耦、而文勢有不得不然者（至言不出の下、疑うらくは脱文あり。蓋し上文の対語にして、於衆人之心の耦有るなり。古人は対耦を重んぜずと雖も、文勢に然らざるを得ざる者有ればなり）。

『彫題』中に履軒は何箇所も「文勢」の語を使用している。ただ、「文勢」の語はやや意味の曖昧な表現である。①の「而後乃今」のうち「而後」の語が衍文だという『彫題』の説は他の注釈にあまり見えず、また、「文勢」の語の意味するところも曖昧である。この箇所については、むしろ逆に「而後乃今」を連文と見なせば問題はないとする論者もいる（注13）。

①と比較すれば、②はまだ意図がわかりやすい。すなわち、「高言」以下の文章と「至言」以下の文章とを整合させるべきだとの履軒の主張である。具体的な文言は不明だが、「高言不止於衆人之心」と「至言不出□□□□□□□□□□」を対句にして、文章の流れを滑らかにすべきだと履軒はいう。ただ、①でも述べたように「文勢」の語は論者によって評価に大きな相違があり、訓詁の語としてはやや不適切なニュアンスの語であろう。

次に「文例」（文脈）を根拠とする事例を検討する。

③天運篇一二三頁

「本文」……故曰、以敬孝易、以愛孝難。以愛孝易、而忘親難。忘親易、使親忘我難。使親忘我易、兼忘天下難（……故に曰く、敬を以て孝なるは易く、愛を以て孝なるは難し。愛を以て孝なるは易く、親を以て孝なるは難し。親を以て孝なるは易く、親をして我を忘れ使むるは難し。親をして我を忘れ使むるは易く、天下を兼ね忘るるは難し）。

「彫題」拋文例、而字疑衍（文例に拋れば、而の字 疑うらくは衍なり）。

④秋水篇一三八頁

「本文」……是故大知觀於遠近。故小而不寡、大而不多。知量無窮（……是の故に大知は遠近を觀る。故に小なれども寡なしとせず、大なれど

も多しとせず。量の窮まり無きを知らばなり。

「雕題」扱文例、無窮之下、蓋脱也字。是句解上文之意也（文例に扱れば、無窮の下、蓋し也の字を脱す。是の句 上文の意を解せばなり）。

③は上述の「文勢」の語と同じく前後の続き具合に合わせるべきだとの履軒の主張である。④も同様に文脈によって履軒が判断したものでろう。したがって、この「文例」の語も「文勢」と同様に履軒の語感に根拠があるものだから、訓詁の論拠としては必ずしも強いとはいえない。

これまで挙げた例のように、論拠の不明確な『雕題』の解釈ばかりかといえそうではなく、注釈の論拠について詳細に述べた箇所もある。

最後に「文勢」「文例」といった曖昧な根拠ではなく、詳細な根拠を述べた事例について検討する。

⑤山木篇一五八頁

「本文」若夫万物之情人倫之伝、則不然。合則離、成則毀、廉則挫、尊則議、有為則虧、賢則謀、不肖則欺。胡可得而必乎哉。悲夫（夫の万物の情・人倫の伝の若きは、則ち然らず。合えば則ち離れ、成れば則ち毀たれ、廉なれば則ち挫け、尊なれば則ち議き、為す有れば則ち虧け、賢なれば則ち謀られ、不肖なれば則ち欺かる。胡ぞ得て必ず可けんや。悲しいかな）。

「雕題」有為則虧四字、疑衍（有為則虧の四字、疑うらくは衍なり）。

有為則虧、与上文成毀意略同。註有心及名字並謬。又下章有名成者虧句、虧字与成对、与為不对。且上下文並耦对、而是句独隻。又与上文意複、似無發明。蓋註文誤入正文者（為す有れば則ち虧くとは、上文の成毀の意と略ぼ同じ。註の有心及び名の字は並びに謬なり。又た下

章に名成者虧の句有り、虧の字は成と対にして、為と對せず。且つ上下の文は並びに耦對なれども、是の句のみ独り隻たり。又た上文と意複なりて、發明無きに似る。蓋し註文の正文に誤入する者なり）。

⑤では「有為則虧」の語が衍文だと指摘する意図を履軒は説明している。すなわち、「有為則虧」は上文に見える「成則毀」と意味が重複しており、「有心於事為、其名必虧（心事為に有れば、其の名は必ず虧く）」と述べる『口義』の注釈も誤りだとする。さらに山木篇下部の「名成者虧（名成る者は虧く）」の語から見れば、「成」と「虧」とを對すべきで、「為」と「虧」とを對すべきではないという。また、上下の句がすべて對句になっているのに対して、この「有為則虧」のみが對句ではないなどと種々の理由を挙げたうえで、注の文章が本文に混入したものと履軒は主張している。実際のところ、『呂氏春秋』必己篇に、引用した山木篇とほぼ同内容の文章があり、そこらは「若夫万物之情人倫之伝、則不然。成則毀、大則衰、廉則判、尊則虧、直則軌、合則離、愛則墮、多智則謀、不肖則欺。胡可得而必」となっている。一見してわかるように、やや語順は相違しているが、『呂氏春秋』の方には「有為則虧」の語は見えない。したがって、『雕題』の解釈もあながち履軒の勝手な憶測だとはいえないだろう。

⑥人間世篇四八頁

「本文」匠石帰。櫟社見夢曰、汝将悪乎比予哉。若将比予於文木耶。夫粗梨橘柚果蓏之属、実熟則剝、剝則辱、大枝折、小枝泄。此以其能苦其生者也（匠石帰る。櫟社 夢に見られて曰く、汝 将た悪にか予を比するや。若 将た予を文木に比するか。夫れ粗梨橘柚果蓏の属は、実熟すれば則ち剝がれ、剝がれば則ち辱められ、大枝は折られ、小

枝は泄^ひかる。此れ其の能を以て其の生を苦しむる者なり。

「雕題」是章大有脱文。比予於文木邪之下、蓋論梗柀^{トウ}柀^{トウ}杉、以其文采受災、為棺椁諸器也。其次又論予章之属、以良材受災、為棟梁楹柱、然後及果木果蓏也。今脱此数条、以粗梨上接文木、殊為不通。果木豈容称文木哉。且材之良而受災之尤者、唯棟梁棺椁為最。捨此而論果木災未至死者、烏可也（是の章 大いに脱文有り。比予於文木邪^{トウ}の下、蓋し梗柀^{トウ}杉の、其の文采を以て災を受けて、棺椁諸器と為るを論ずるなり。其の次に又た予章（樹木の名前）の属の、良材を以て災を受けて、棟梁楹柱と為るを論じて、然る後に果木果蓏に及ぶなり。今 此の数条を脱して、粗梨を以て上に文木を接^つぐるは、殊に通ぜざると為す。果木は豈に文木と称するを容れんや。且つ材の良にして災を受くるの尤だしき者は、唯だ棟梁棺椁もて最と為す。此れを捨てて果木の災の未だ死に至らざる者を論ずるは、烏くんぞ可ならんや）。

⑥は『雕題』によく見える脱文指摘の一つである。本文は「文木」の語の下部に「粗梨橘柚果蓏」などの果実の類いが列挙されているが、「粗梨橘柚果蓏」の前に、「梗柀^{トウ}柀^{トウ}杉」などの、その美しい外見が災いとなって、ひつぎの類いに加工される木々、そして、「予章」などの、その良質の木材であることが災いとなって、「棟梁楹柱」などの建築物に利用される木々について論じた後に果実の類いに言及すべきだとする。「粗梨橘柚果蓏」などはあくまでも果樹であり、「文木」の語は当てはまらないと履軒はいう。良質の材料でなおかつ切り倒されて死に至る災いを最も受けているのは、ひつぎや建築素材として利用される「梗柀^{トウ}柀^{トウ}杉」や「予章」などの木材であり、果実を採られたりそのために枝を折られたりといったことがなされながら、その果樹自体はまだ死に至っていない「粗梨橘柚果蓏」の類いは、大いに

被害のある「文木」とまではまだいえないと履軒は説くのである。この部分の履軒の解説はやや冗長だといえなくもないが、ある程度は理に適っているといえよう（注14）。

このように、『雕題』は、該当箇所に対して、上下の文章の言いまわしにできる限りそろえようという傾向があること、やや冗長に思えるほど論理的に解釈しようとするなどがあるが、その特徴だといえる。これらは履軒の合理的思考の表われだと筆者は考えるが、このような『雕題』の解釈はどの程度の水準を有しているといえるのだろうか。

四 『莊子雕題』の解釈の水準

本章では、『雕題』の注釈を他の注釈と比較することで『雕題』の水準の高さについて検討する。

まずは、通説とはまったく相違する『雕題』独自の解釈を紹介する。たとえば以下のような事例である。

① 在宥篇九一〜九二頁

「本文」君子……、故貴以身於為天下、則可以托天下。愛以身於為天下、則可以寄天下（君子は……、故に身を以^{おさ}むるを天下を為^{おさ}むるより貴べば、則ち以て天下を托^{たく}す可し。身を以^{おさ}むるを天下を為^{おさ}むるより愛すれば、則ち以て天下を寄^{たく}す可し）。

「雕題」以身疑是己身之訛矣。以已通。乃是已甚之已。文形肖自己之己、故訛焉。又転為以字耳。古書以字多作已字。後來伝写分作已以兩字、而詭謬隨之、遂兩字相通作詭。如班馬史歷々可証（以身 疑うらくは是れ己身の訛^{あやま}りなり。以已は通ず。乃ち是れ已甚の已なり。文形

自己の己に肖るが故に訛るなり。又た転じて以の字と為るのみ。古書に以の字は多く己の字に作る。後來伝写するとき分ちて己の両字を作りて、訛謬之に随いて、遂に両字相通じて読みを作る。班〔固・司〕馬〔遷〕の史の如きは歴々証す可し（注15）。

①は『老子』第一三章に「……、故貴以身為天下、若可寄天下。愛以身為天下、若可託天下（……、故に身を以むるを天下を為むるより貴べば、若ち以て天下を寄す可し。身を以むるを天下を為むるより愛すれば、若ち以て天下を託す可し）」とあるのとはほぼ同内容である。通説では『老子』の文章も含めて、たいてい「以身」の語を「身を以むる」と訓んでいる。しかし、『雕題』では、もともと「己身」の語であったものが字形の類似によって「己」が「已」に間違えられ、さらに音が通用することで「己」が「以」と表記されるようになって「以身」になったと主張する。確かに『雕題』の主張するように訓んでも意味は十分通じる。ただ、履軒のように「以」を「己」に代えなくても意味は通じるうえに、基本的に本文の文字を更改することを憚るべきだとする伝統的立場からすれば、履軒の説の説得力はあまりないようにも思われる。ただ、上述のように、本文変改を憚る意識の低さは、やはり履軒の特徴だといってもよいだろう（注16）。

② 達生篇一五六〜一五七頁

「本文」忘足、履之適也。忘要、帶之適也。知忘是非、心之適也。……始乎適、而未嘗不適者、忘適之適也（足を忘るるは、履の適なり。要を忘るるは、帶の適なり。知 是非を忘るるは、心の適なり。……適に始まりて、而も未だ嘗て適せずんばあらざる者は、適を忘るるの適なり）。

「雕題」始字疑當作忘。而下忘適之忘衍文。曰、忘乎適、而未嘗不適者、適之適也。莊子之文、層々説下、而未每進一步。所謂婪尾者、例如此。故意其訛舛、敢有所正也。若旧本文、意贖々、註亦牽強（始の字疑うらくは当に忘に作るべし。而して下の忘適の忘は衍文なり。曰く、適を忘れて、未だ嘗て適せずんばあらざる者は、適の適なり、と。莊子の文、層々に下に説きて、未毎に一步を進む。いわゆる婪尾（最後）なる者にして、例は此くの如し。故に意は其れ訛舛して、敢えて正す所有るなり。旧本文の若きは、意贖々（無知である様子）にして、註も亦た牽強なり）。

②は大宗師篇の「若狐不偕務光伯夷叔齊……、是役人之役、適人之適、而不自適其適者也（狐不偕・務光・伯夷・叔齊……の若きは、是れ人の役を役とし、人の適を適として、自ら其の適を適とせざる者なり）」に基づく。大宗師篇の文章は、他人の仕事を自分の仕事と誤解し、他人の快適さを自分の快適さと誤解して、自分で自分自身の快適さを味わうことをしなかつた狐不偕・務光・伯夷・叔齊らを批判する内容である。逆に莊子の主張は「自ら其の適を適とすべし」、すなわち自分自身の快適さを快適さとして味わうべきだというのが、この達生篇の文章では『雕題』は「適を忘れて、未だ嘗て適せずんばあらざる者は、適の適なり」、すなわち快適さを自覚しないままで快適であることは、まさしくそれが快適であり、それこそ快適中の快適、最高の快適だと履軒は解釈している。意味としては通説の通りに「適を忘るるの適」と訓んでも大きな相違はないようだが、元の本文のままではやや意味不明瞭であり、『口義』の注釈も牽強付会になっていると履軒は批判する。

このように、『雕題』には通説とまったく相違する注釈が数多く存在して

いる。上述したように、赤塚『莊子』では履軒の『雕題』を江戸時代の『莊子』注釈として独自の見解を示すものと紹介している。そこで、次に『雕題』の本文批判の事例を中心に、赤塚『莊子』を始めとする他の注釈と比較することで『雕題』の水準をはかってみることにする。

③ 人間世篇四五頁

「本文」獸死不忤音、氣息莽然、於是並生心厲、(獸の死するとき音を忤ばず、氣息莽然(息づかいの激しい様子)として、是において並びに心厲を生ず)。

「雕題」心厲、疑うらくは当に厲心に作るべし。猶惡心を言うなり(心厲、疑当作厲心。猶言惡心也。)

③は、獸が死に瀕した際には、その息づかいも激しくなり、良からぬ荒々しい心持ちになると述べている。それに対して、『雕題』では「心厲」は「厲心」とすべきであり、惡心(良からぬ心)の意だとする。赤塚『莊子』では同箇所の解釈として「心厲」は、厲心と同じ。人にかみついたり、物をかきむしったりする荒れ狂う心をいう(赤塚『莊子』上卷一九〇頁)と述べているから、『雕題』と同じ方向の解釈だといえる。ただし、池田『莊子』の同箇所の解釈では「於是並生心厲」は、宣穎の「至此、則彼此皆生惡心矣。」がよい(池田『莊子』上卷二八五頁)と述べており、「心厲」を惡心の意としたのは『南華經解』を著わした明末清初の宣穎が最も早い。

④ 田子方篇一六九頁

「本文」孔子見老聃。……少焉見曰、丘也眩与。其信然与。向者先生形体掘、若槁木、似遺物離人而立於独也。老聃曰、……至陰肅肅、至陽赫赫。

肅肅出乎天、赫赫發乎地。兩者交通成和而物生焉(孔子 老聃に見ゆ。……少焉して見えて曰く、丘や眩めるか。其れ信に然るか。向者先生の形体は掘として槁木の若くして、物を遺れ人を離れて独り立つに似たり。老聃曰く、……至陰は肅肅たり、至陽は赫赫たり。肅肅は天より出て、赫赫は地より發す。兩者は交ごも通じ和を成して物生ず)。

「雕題」掘、崛同(掘は、崛に同じ)。

天地両字相易而後義明。疑は伝写之訛。莊生之拗亦必不至于此(天地の両字は相易えて而る後に義明らかなり。疑うらくは是れ伝写の訛りなり。莊生の拗も亦た必ず此に至らざらん)。

④は、老子の風貌を表わす「掘として槁木の若し」の「掘」の字と、老子の語に見える「肅肅は天より出て、赫赫は地より發す」の「天」「地」の字に関する『雕題』の解釈である。「掘」字の解釈として、赤塚『莊子』では「掘」は、崛(一つだけ高く突立つさま)の仮字(赤塚『莊子』下卷二二二頁)と述べて、『雕題』とまったく同じ解釈をする。池田『莊子』は「掘は林希逸の「兀兀然也」でよい。他に王先謙の「同倔」、奚侗の「借作拙」、于省吾の「応詭蹶」、赤塚忠の「崛の仮字」などの説があるが、大体同じ意味になる(池田『莊子』下二〇五〜二〇六頁)と述べて、諸説中の一説として赤塚説を紹介している。「天」「地」の字については、『雕題』は「天」「地」をそれぞれ入れ替えるべきだという立場だが、赤塚『莊子』の解説は「陽気は天から發し、陰気は地から出るとされているのに、これはその逆になっている。……恐らくは、天地の二字を誤倒しているであろう(赤塚『莊子』下卷二二二頁)と述べている。同箇所の池田『莊子』では「天・地は、高亨・李勉が互換するが、ママでよい(池田『莊子』下二

○六頁）とあり、『雕題』と同じ説である赤塚説を紹介せずに、ここでは近年の中国入学者である高亨や李勉の説として紹介する。

上述した③④ともに、赤塚『莊子』も池田『莊子』も『雕題』と同じ内容の解釈を紹介しながら『雕題』には触れていない。池田『莊子』はともかく、赤塚『莊子』はその「解説」で『雕題』に言及しながら、個々の注釈では『雕題』の名前を出さないのは如何なものだろうか。恐らく悪意はないものと考えられるが、赤塚氏は実はさほど『雕題』を読みこんでいなかったのではないだろうか。最後に、赤塚氏が『雕題』の説を参照していないと考えられる事例を取り上げる。

⑤ 天地篇一〇一〜一〇二頁

「本文」若然者、……不拘一世之利以為己私分、不以王天下為己処。頭、則明、万物一府、死生同状（然るが若き者（君子）は、……一世の利を拘りて以て己の私分と為さず、天下に王たるを以て己の頭に処ると為さず。頭は則ち明なり。万物は一府にして、死生は同状なればなり）。

「雕題」頭則明三字、疑衍（頭則明の三字、疑うらくは衍なり）。

⑤は『莊子』本文の「頭則明」の語が衍文だろうという『雕題』の解釈である。この衍文説は少なからぬ注釈書が取り上げているが、まず赤塚『莊子』では諸説を紹介しつつ「頭則明」は、頭字の傍注が本文に混入したものである（岡松甕谷説）（赤塚『莊子』上巻四五九頁）と述べており、『雕題』の説ではなく岡松甕谷『莊子考』の説としている。他の注釈書も同様で、池田『莊子』では「朱得之によって「頭則明三字衍文」と見るべきである。注文が経文に混入したのである」（池田『莊子』上巻六九〇頁）と述べて、明の朱得之の説としている。ついでに述べるならば、金谷『莊子』

も「頭則明」三字を注文が本文にまぎれこんだものと見る錢穆の説に従う」（金谷『莊子』第二冊一〇〇頁）と述べて、近年の中国入学者である錢穆の説とする。時代的には朱得之が先行しているが、どの訳注書ともに『雕題』に「頭則明」を衍文とする説があることに言及していないのである。

⑥ 大宗師篇六二頁

「本文」古之真人、……警乎其未可制也。連乎其似好閉也。惛乎其言也（古の真人は、……警乎（超然とした様子）として其れ未だ制す可からざるなり。連乎（ゆつたりとした様子）として其れ閉ざすを好むに似たるなり。惛乎（茫然とした様子）として其の言を忘るるなり）。

「雕題」忘其言、恐当作其忘言（忘其言は、恐らくは当に其忘言に作るべし）。

⑥は、当該箇所における文章の続き具合から見て「其忘言」とする方が正しいという『雕題』の見解である。ただ、赤塚『莊子』では「忘其言」は上文の例からすれば「其忘言」の誤写である（聞一多説）（赤塚『莊子』上巻二六九頁）といい、池田『莊子』では「忘其言は、言を説の誤りとす（劉師培・馬叙倫）、二字を其忘の誤りとす（聞一多・高亨）」があるが、ともに取らない（池田『莊子』上巻四〇八頁）と述べる。また、金谷『莊子』は「其忘言」底本では「忘其言」とあるが、前文の例から考えて改めた（金谷『莊子』第一冊一八一頁）という。この⑥の例においても、どの訳注書も聞一多や高亨には言及しているが、『雕題』の解釈が時代的に最も先行しているにもかかわらず『雕題』の名前を挙げてはいない。

⑦秋水篇一四四頁

「本文」且彼方趾黄泉而登大皇。無南無北、夷然四解、淪於不測。無東、無西、始於玄冥、反於大通（且つ彼は方に黄泉を趾みて大皇に登る。南無く北無く、夷然（溶ける様子）として四解して、測られざるに淪む。東無く西無く、玄冥に始まりて、大通に反る）。

「雕題」無東無西、恐当作無西無東、韻乃諧（無東無西、恐らくは当に無西無東に作るべし、韻は乃ち諧う）。

⑦は、上文の「北」と「測」とが押韻していることから「無東無西」の「東」と「西」とを入れ替えて「無西無東」とすることで「東」と「通」との韻を合わせるべきだという趣旨である。同箇所に対して赤塚『莊子』は「東」「通」は東部韻であつて、これらが前文の例からみて押韻するには、「無西無東」とあるべきである（王引之説）（赤塚『莊子』下五六頁）といい、池田『莊子』は「無東無西」は、王念孫『讀書雜誌』は押韻の上から「無西無東」に作るべしとし、姚鼐を始めとして支持者が多いが、今は改めないでおく（池田『莊子』上巻一〇七一頁）と述べる（注17）。また、金谷『莊子』も「無西無東」諸本とも「西」と「東」が顛倒している。押韻の関係で改めよという王念孫の説に従つた。「東」と下文の「通」とが韻をふむ。なお上文では「北」と「測」が韻をふむ（金谷『莊子』第二冊二七七頁）と述べていて、池田『莊子』と同じく、王念孫が『讀書雜誌』で「無東無西、当作無西無東。北測為韻。東通為韻（無東無西、当に無西無東に作るべし。北測は韻を為す。東通は韻を為す）」とする説に与している（注18）。どの訳注書も押韻に着目して本文を改変すべきだとしているが、やはり『雕題』の名前は挙げていない。ちなみに履軒には『諧韻瑚璉』という著述があり、押韻に関する履軒の造詣の深さを示している。

このように、⑤⑥⑦の事例はすべて、赤塚『莊子』では『雕題』の名前をまったく挙げず、『雕題』と同内容の解釈を他の学者の説として取り上げている。これらの事例から、赤塚『莊子』は、「解説」で履軒の『雕題』の名前を挙げているにもかかわらず、やはり実際には『雕題』をよく読みこんではいなかったと考えられる。また、『雕題』と同様の解釈が通説として他の訳注書にもよく紹介されていることから、『雕題』の解釈には相当高い水準にある注釈が多く含まれていることがうかがえるのである。

おわりに

以上、中井履軒の『莊子雕題』の特徴について考察してきた。『莊子雕題』では、その合理的思考に基づいて本文改変をするために、他の注釈に比べて本文批判の非常に多いことがその特徴として挙げられる。そして、他の注釈には見られない履軒独自の解釈も少なからず見受けられる。それらの独自の解釈は恣意的な解釈を展開しているのではなく、一定の根拠に基づいた合理的解釈であり、池田『莊子』などで詳細に紹介される諸注釈書に基づいた通説と暗合する項目も多いことが明らかになった。したがって、『莊子雕題』の注釈が高い水準にあることが裏づけられたといえる。

このように高い水準を有する『莊子雕題』の注釈ではあるが、現在の訳注書でその名前が取り上げられるのは、上述のように赤塚『莊子』のみである。江戸時代は、伊藤仁斎や荻生徂徠らの名前を挙げるまでもなく、漢文に対する高い能力を有する儒者が数多く存在していた。中国の古典に対する注釈書にしても、たとえば経書では仁斎の『論語古義』や徂徠の『論語徴』、諸子では太田全斎『韓非子翼蠹』や安井息軒『管子纂詁』など、その考証水準の高さで著名な注釈書が多い。ただ、その中で中井履軒の注釈

はそれほど多く取り上げられているわけではない。例外的に『史記』の注釈書として著名な瀧川亀太郎の『史記会注考証』において、履軒の『史記雕題』の説を多く取り上げているのがめだつ程度である(注19)。

日本には長い漢文研究の歴史があり、中国古典注釈について、相当数にわたる業績の蓄積がある。『莊子雕題』もその業績の一つであり、本稿での検討からその注釈が高い水準にあることが明らかになった。したがって、江戸時代の『莊子』研究全般についても相当高い水準にあった可能性がある。ただ、上述したように、現在の『莊子』研究において、『莊子雕題』を始めとする江戸時代における『莊子』注釈の業績が十分に踏まえられているとは必ずしもいえない。今後、『莊子』研究を進めるには、江戸時代の『莊子』注釈に対する従来の認識を改めたうえで、江戸時代の『莊子』研究により一層眼を向けるべきだと考える。

本稿では『莊子雕題』の注釈のうち、衍字衍文や語順の入れ替えなど、本文批判の事例を主に取り上げて紹介した。しかし、『莊子雕題』には、本文批判だけでなく、本文の解釈も含めて、他の注釈家に先駆けて同内容の注釈を施している箇所も実は相当数存在する。それらの事例の様相は、別稿において検討を試みたい。また、履軒の『莊子雕題』以外にも、赤塚『莊子』や福永『莊子』において言及されている杜多秀峰『郭注莊子覈玄』、宇津木益夫『解莊』、帆足万里『莊子解』、岡松甕谷の『莊子考』など、明治時代の注釈も含まれるが、主に江戸時代の『莊子』研究もその内容が十分に研究されているとはいいがたい。今後、これらの『莊子』研究にも注目して検討を進めてゆきたいと考える。

注

- (1) 本書は、池田知久『莊子』(上・下)(中国の古典5・6、学習研究社、上巻は一九八三年・下巻は一九八六年に刊行)を文庫化にあたって改稿した書である。
- (2) 福永『莊子』は、もと新訂中国古典選として一九六六〜一九六七年に全三冊として出版された書が同じ朝日新聞出版から改めて文庫本として出版されたものである。なお、福永光司の『莊子』注釈としては『莊子 内篇』(講談社学術文庫、二〇一一年。朝日新聞出版の内篇の部分のみを再刊)や興膳宏との共訳『莊子』(世界古典文学全集第一七巻、筑摩書房、二〇〇四年。後にちくま学芸文庫から二〇一三年に全三冊本として再刊)がある。池田『莊子』では、他にも森三樹三郎『莊子』全三冊(中公文庫、一九七四年)、市川安司・遠藤哲夫『老子・莊子』(上・下)(新釈漢文大系第七・八巻、明治書院、上巻は一九六六年・下巻は一九六七年に刊行)を始めとする訳注書や本文の文字異同の指摘などに多く言及する。本文の文字異同に関する研究で取り上げられるのは、主に武内義雄『老子と莊子』(『武内義雄全集』第六巻、角川書店、一九七八年)、寺岡龍含『敦煌本郭象注莊子南華真經校勘記』(福井漢文学会、一九六一年)、狩野直喜『旧鈔卷子本莊子殘卷校勘記』(東方文化学院、一九三二年)などである。
- (3) 福永『莊子』(内篇)二三〜二四頁。
- (4) 赤塚『莊子』上巻二二頁。
- (5) 中井履軒『莊子雕題』に関する筆者のこれまでの研究は以下の通りである。
「中井履軒撰『莊子雕題』諸本について」(『中国研究集刊』辰号[総一三三号]、一九九三年)

「中井履軒の『莊子』観」(『中国研究集刊』収号[総二三三号]、一九九八年)
「中井履軒『莊子雕題』と林希逸『莊子膚齋口義』と」(『中国研究集刊』成号

〔総二八号〕、二〇〇一年)

『莊子雕題』に見える中井履軒の聖人観」(『中国研究集刊』呂号〔総三二号〕、二〇〇二年)

(6) 本稿における『雕題』の引用は、本文で言及した懷徳堂記念会編『莊子雕題』を底本とする。ただし、文字の問題にかかわるもの以外は、旧字体を新字体に改め、俗字や略字等の異体字も適宜改めて句読点を附した。『口義』からの引用も同様。なお、履軒が『雕題』を書き入れた『口義』は、寛文五年風月庄左衛門刊の刊記がある和刻本である。引用時は原文を主として、後部の()内に書き下し文を記したうえで、篇名と引用する懷徳堂記念会編『莊子雕題』の頁数とを表記する。

(7) 書き下し文中の()は、その前の話の意味を表わし、()は、文意をわかりやすくするために筆者が補った語である。以下、同じ。

(8) ただし、履軒自身、『莊子』に見える「聖人」の語については儒学的「聖人」の意に解している。したがって、必ずしも『莊子』を『莊子』を以て解する立場を徹底しているわけではない。詳細は注5の拙稿「中井履軒の『莊子』観」と『莊子雕題』に見える中井履軒の聖人観」を参照。

(9) ただし、『口義』への批判の語とは別に、履軒は『莊子』の文章に対して高い評価を与えている。西村天囚『懷徳堂考』(上巻は一九一〇年(明治四三)、下巻は一九一一年(明治四四)に印行、一九八四年(昭和五九)に懷徳堂友の会より復刻)に、「履軒の文を論ずるや、論語を天地間第一の文章と為し、孟子これ之に次ぎ、莊子之に次ぎ、左伝史記之に次ぎ、其餘韓柳以下学ぶに足らずと為す」(三七章、履軒の文詩)(下巻七五頁)と述べる。履軒にとって、『莊子』は『論語』『孟子』に次いで文章の模範とすべき書であった。

(10) 王念孫『讀書雜誌』余編上第一六冊一四頁(北京市中国書店、一九八五年)。

(11) 赤塚『莊子』上巻一五七頁。

(12) 金谷『莊子』第一冊四八頁。

(13) 湯浅廉孫『初学漢文解釈ニ於ケル連文ノ利用』(文求堂書店、一九四一年)において、「而後」と「乃今」とのどちらか一方で「そこで」の意になるが、作者の修辭的気分によって「而後乃今」のように連文を構成していると述べる(同著一三八頁)。

(14) 同箇所『口義』に「相梨橘柚果蔬、皆文木之可食者。故為人摧折、是以其能而害其生(相梨橘柚果蔬は、皆な文木の食らう可き者なるが故に人の為に摧折(くじきおる)せらる。是れ其の能を以て其の生を害せらる)とあるのに対して、『雕題』は「相梨、謂之文木、可也。若橘柚、未聞其文。況果蔬乎。且叙下文剝辱之災、全係果実、不関乎材之文彩也。是不知脱文。妄逐文作解者、不可従(相梨は、之を文木と謂うも、可なり。橘柚の若きは、未だ其の文を聞かず。況んや果蔬をや。且つ下文に叙ぶる剝辱の災は、全て果実に係わりて、材の文彩に関わらざるなり。是れ脱文あるを知らざればなり。妄りに文を逐いて解を作す者は、従う可からず)(人間世篇四八頁)と述べる。厳密にいえば、「相梨」のみは「文木」と称してもよいが、「橘柚」や「果蔬」は「文木」に該当しないと履軒は説明する。

(15) 『雕題』の引用の後部には、さらに「貴ミカ己ニ身ヲ於テ為ルニシテハ天下ヲ愛ス己ニ身ヲ於テ為ルニシテハ天下ヲとあり、「身を以むるを天下を為むるより貴ぶ」ではなく、「己れの身を天下を為むるより貴ぶ」と訓むことを履軒が訓点を附して念入りに示しているが、本文では省略した。

(16) 履軒の『老子』注釈である『老子雕題』においても『老子』第一三章の同箇所に対して「唯自貴其身、如貴天下之寵者、可以寄天下也。……唯自愛其身、如愛天下之富者、乃可以托天下也(唯だ自ら其の身を貴ぶこと、天下の寵を貴ぶが如き者は、以て天下を寄す可きなり。……唯だ自ら其の身を愛すること、天下の富を愛するが如き者は、乃ち以て天下を托す可きなり)」とあり、『莊子雕

『老子雕題』における履軒の訓みと同じ方向の訓みをしている。なお、『老子雕題』は関儀一郎編『日本儒林叢書』第六卷（東洋図書刊行会、一九二九年）所収の『老子雕題』を底本とする。解題によれば、その底本は帝國図書館（現国会図書館）所蔵本に拠るとある。ちなみに『老子雕題』の履軒自筆本は散逸している。

(17) 赤塚『莊子』において「王引之説」とあるのは「王念孫説」の誤りである。

(18) 王念孫『読書雑誌』余編上第一六冊二二～二三頁（北京市中国書店、一九八五年）。

(19) たとえば、『史記』老子韓非列伝「其著書十余万言、大抵率寓言也（其の（莊子の）著書十余万言、大抵率^{おおむ}ね寓言なり）」の箇所、『史記会注考証』に「中井積徳曰、寓言、空言無実。仮人而述、如寓人之寓、無相与之義（中井積徳曰く、寓言は、空言にして実無し。人を仮りて述ぶること、寓人（人形）の寓の如くして、『史記索隱』に「別録云、作人姓名、使相与語。是寄辞於其人。故莊子有寓言篇（別録に云わく、人の姓名を作りて、相与の語を使う、と。是れ辞を其の人に寄す。故に莊子に寓言篇有り）」と見える）相与の義無し」と『史記雕題』の注釈を引いている（ただし、履軒自筆本『史記雕題』には「空言無実」の前の「寓言」の語は見えない）。なお、寺門日出男『史記会注考証』撰述に見られる非学問性―埋もれた中井履軒撰『史記雕題』、『中国研究集刊』日号（総九号）、一九九〇年）によれば、実際には履軒の説が履軒の名前を冠することなく瀧川氏の自説として紹介されている項目も数多く存することである。

藤居 岳人（ふじい・たけと）

一九六五年生まれ。阿南工業高等専門学校教授。専門は中国思想史、日本思想史。著書に『懷徳堂儒学の研究』（大阪大学出版会、二〇二〇年六月）、共著に『教養としての中国古典』（湯浅邦弘編著、ミネルヴァ書房、二〇一八年四月）、『中国思想基本用語集』（湯浅邦弘編著、ミネルヴァ書房、二〇二〇年三月）、主要論文に「龍野藩の儒者と中井竹山と」、『懷徳』第八八号、二〇二〇年一月）など。